

事実に基づくと授業研究を通じ 考える力を育む授業づくりを

国士舘大体育学部教授 北俊夫

知識・技能はもちろん、考える力や学習意欲を育む授業づくりがより重要になっている。
国士舘大の北俊夫教授は、子どもに考える力を付ける手立てを
多くの教師が共有できるようにするためには、校内での授業研究が極めて重要な役割を果たすと語る。

授業研究を充実させる必要性

考える力を育む手立てを 授業研究を通じて確立する

子どもに学力を付けること——これは子ども自身や保護者のみならず、社会全体の関心事であり、学校には常に大きな期待が寄せられています。

教育活動の中で、学力向上と最も密接な関係があるのは授業です。授業を行う教師の役割を一言で表すと「分からない子どもを分かるようにすること」でしょう。それが出来る一人前のプロの教師であるために、教師は授業力を絶えず高めなければならないのです。

では、「授業力」とは何か。授業力の構成要素は五つに整理できます(図)。これらは、これまでもこれからも重要な不易の要素です。加えて、今後はパソコンや電子黒板、デジタル教科書などを効果的に活用する力も、授業力の要素となるでしょう。

日本の教師は、知識・技能を教える技術に長け、教え上手といわれています。これは「教育」の「教」に当たります。半面、考える力や意欲など、教えるよりも育てる必要のある「育」の部分の指導は不十分でした。現在も、子どもを学びに向かわせたり、考えさせたりする手立ては必ずしも明確でなく、全教師が共有しているとはいえないでしょう。

今後は、考える力を育む授業をつくること

きた・としお◎東京都公立小学校教諭、東京都教育委員会指導主事、文部省(現文部科学省)初等中等教育局教科調査官、岐阜大学教授を経て現職。専門は社会科教育、教育課程論。著書に「若い先生に伝えたい!! 授業のヒント60」授業相談Q&A」「文溪堂」新教育課程と社会科の授業構想(明治図書出版)など。



が更に重要になります。そこで、これまで以上に大切になるのが、校内の授業研究です。書物に学ぶことも出来ませんが、子どもの思考や理解を促すために子どもの発言をつなげたり、絶妙のタイミングで教材を提示したりする技術は、いわば職人技です。先輩教師の優れた授業を見て真似たり、自身の授業について助言を受けたりすることが成長を促します。授業研究の充実が、子どもに考えさせる手立てを確立する手がかりとなるのです。

図 教師に求められる授業力の要素

- 1 発問や指示によって思考や理解を促す力
- 2 教材を開発して効果的に活用させる力
- 3 子どもの発言を引き出し生かす力
- 4 板書を構造的に構成する力
- 5 子どもの力を評価して授業改善につなげる力

現在と未来をつなぐ小学校教育

授業研究の実践ポイント

事実に基づいて検討し 課題を指摘し合う研究会を

授業研究で重要なことは、「授業の事実に基づいた検討」です。授業研究会に参加すると、「子どもが意欲的に学んでいた」「教材が良かった」という感想をよく聞きます。しかし、なぜ意欲的に学べたのかなど事実に基づいた検討でなければ、次の授業づくりのヒントが得られず、授業改善にも結び付きません。

事実の共有に大きな役割を果たすのが、授業記録です。授業後すぐに協議会を行う時は、授業の流れやポイントとなる発言を中心とした概略で構いません。授業を撮影したビデオを用いてもよいでしょう。私は小学校の教師時代、授業研究会の有無にかかわらず、授業

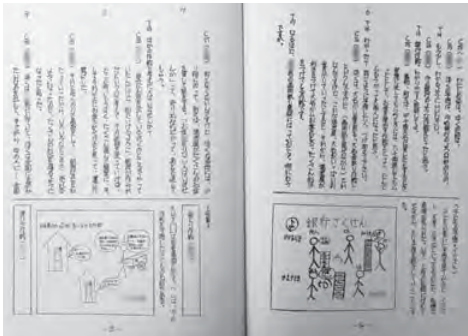


写真 小学校教師時代の北教授が書いた「授業記録」。上段が授業の流れ、下段が授業時の思いやねらい、反省など。発問や発言と共に、教材や資料提示のタイミングも記す。北教授は45分間の授業を7～8時間かけて記録に起こしていた。録音をすると、授業に対する緊張感が薄くのもよさの一つだという

*上記の写真はウェブサイトでご覧いただけます
<http://benesse.jp/berd/> 情報誌ライブラリ (小学校向け)

をテープレコーダーで録音し、発問や子どもの発言を正確に書き起こし、ねらいや反省と共に整理していました(写真)。授業記録から、説明が長すぎたり、よい発言を見逃していたりしていることに気がきます。

授業研究では、授業の課題について検討することも欠かせません。最近の授業研究会では、授業者を褒めることが多いように感じます。私が若い頃は「あの発問は良くなかったね」など、先輩から厳しく指摘されました。しかし、それは指導への批判であり問題点の指摘ですから、授業力の向上に結び付いたと今でも感謝しています。課題の提示からより良い授業づくりへの改善策が生まれます。若手の先生から「褒められるだけでなく、具体的な助言が欲しい」という声をよく聞きます。ベテランの先生には遠慮もあると思います。が、時には厳しい指導が若手の先生を育てるのです。小規模校では人間関係への気遣いから課題を指摘し合うことが難しいかもしれません。その場合、近隣校と合同で授業研究を行うことも考えられます。

校長先生への期待

実態把握に基づいて 授業研究の企画立案を主導

実りある授業研究を行うためには、校長先生

による現状把握が不可欠です。子どもの学力の状況、教師の指導上の課題、国や自治体の教育施策の三つを、バランスよく把握します。

次に、授業研究をマネジメントするという視点で、効果的な研究手法を考えていきます。

校長先生が主導し、必要に応じて、先進校や先行研究に学ぶこと、講師の招へい、他校との合同研修の企画立案などを、学校全体で役割分担をしながら進めていくとよいでしょう。

授業研究を通して、先生方の人間関係が深まることがあります。2年間、授業研究の充実に取り組んだある小学校の校長先生は「先生方が職員室で授業や子どもの様子を話すようになった。雰囲気が変わった」と喜ばれていました。校内研究を通して校内に根付いた校風は学校の伝統になり、更に研究を活性化させるという好循環を生むのです。

ポイント

- 今後求められる考える力を育む授業づくりのためには、授業研究の充実が有効
- 授業の事実に基づく検討や率直に課題を指摘し合うことから、授業の具体的な改善策が生まれる
- 授業研究は、授業力向上だけでなく、教師の人間関係を深め、職員室の雰囲気を変える

*プロフィールは取材時(2011年3月)のものです